

# 製鉄室蘭病院 災害対策進む

## 自家発電を増強

### 停電時でもCT稼働

#### 近隣住民 避難所も

昨年11月に発生した

室蘭や登別などの大規模停電を受け、室蘭市知利別町の製鉄記念室蘭病院（松木高雪院長）は自家発電設備を増強した。停電時でも、コンピュータ断層撮影装置（CT）の稼働が可能になる。建設を進める「がん診療センター」内には避難所機能を設けるなど、災害対策を着実に進める計画だ。

同病院は大規模停電発生時に「（停電が無かった）地域的な部分と、新日鉄住金室蘭製鉄所の自家発電装置から、専用の送電線によ

る電力供給などで、停ため、救急患者の搬送電は回避できた」（同も集中した。病院）という。通常のその後、災害対策な診療体制を維持できた。救急

疾患をはじめ、多くの症例の診断に効果を発揮するCTが稼働できる電力について「常に

確保する」（同）観点から、自家発電装置の増強を決めた。具体的には今年9月末までに院内の自家発電装置を改修してCTへの専用配線を設けた一方で、別の発電装置も新設。「仮に室蘭製鉄所からの送電が途絶えても、CT稼働分の電力は確保ができる」（同）という。

また、来年6月の開設を目指して建設を進める「がん診療センター」内の講堂（約300平方メートル）は、非常時には外来患者や近隣住民らの避難所に転換する。専用の備蓄庫も設け、水や食料、簡易ベッドも常備する。同病院では「昨年の大規模停電を踏まえ、CTを稼働させる重要性をあらためて認識した。今後の万一の事態に備え、体制を整備することも地域の病院としての責務」としている。（松岡秀宣）